

一般演題8-4 音響装置を付設した第一種治療装置に対する考察

小松利明 中村能史

医療法人財団 正明会 山田記念病院

【はじめに】

1. 付設の経緯

今から30年ほど前、患者側よりHBO治療の際にラジオを所望されたことに端を発する。治療装置特有の閉塞感や拘束感からの不安や苦痛の軽減を目的に治療装置に音響装置を付設した。

2. 使用機材の構成

市販のラジオカセットのヘッドホンジャックからスピーカーシステムを経由してチャンバー扉部に取り付けたアクチュエーターユニット(後付けスピーカー)につながり、チャンバー筐体(パロテックハニユウダ製第一種装置KS-202型スチールチャンバー)を音響装置として共鳴させるものである。

3. 音響装置の有効性についての検証

かねてより第一種装置特有の閉塞感から治療を断念するケースへの心痛から、音響装置が不安や苦痛の軽減、意識障害者の意識改善に効果的であるか、検証の目的から平成22年4月から平成27年8月まで約5年間患者への治療前後の聴き取り調査を行った。

【調査の概要】

治療前オリエンテーションの段階で治療装置の特徴を説明し、苦痛や不安の軽減に音響が有用である旨、説明する。希望者は音楽かラジオ番組か選択し治療中希望の音声を流す。

治療後、チャンバー内の感想や音響によって不安や苦痛が軽減されたかアンケートをとり、今後の使用や希望を尋ねる。意識障害者については治療前後の意識レベルの推移をJCSによりはかる。

流す音声は、CDでは基本的に癒し効果のあるもの(歌のない童謡・BGM等)を中心にクラシックや懐メロ等。ラジオ番組ではトーク中心の番組よりFMや話し声でも比較的単調な宣伝のない国会中継が好まれた。

【調査結果】

平成22年4月から平成27年8月までの治療患者数

124名の内、音声の希望者は74名(59.7%)、不要と答えた方50名(40.3%)。希望者の内訳ではCD31名(41.9%)、ラジオ番組43名(58.1%)であった。

音声希望者の治療後の感想の殆どが閉じ込められていると云う不安感が薄まり、治療時間も音に集中することで苦痛も軽減されたと答えている。聞き覚えのある癒し効果が得られる音楽はより不安や苦痛が軽減された。意識障害者の意識レベルは不変、もしくは改善傾向がJCSより窺えたが、HBOの治療効果か音響の刺激によるものかは判断できなかった。

音声は不要と答えた方の多くはテレビを好まれた。また、患者周囲の騒音による不眠から安眠を求められる方もいた。なくても構わないと答えた方の一部には治療後、音声を希望される方もいた。

【考察】

音響装置の利用は治療継続の一助となり、患者と医療者の関係をより近付けるコミュニケーションツールの一つとなる。

【結語】

第一種治療装置に特有の閉塞感はチャンバーの種類に係らずあり得るが、照明や映像による視覚サポートの他、音声による聴覚サポートも重要である。これらサポートツールを有効活用することにより恐怖感の軽減、治療の継続につながることを期待する。また、意識障害者についての検証は各研究機関に委ねたい。